

寺田貞次による小豆島の考古資料調査 —小豆島で保管されてきた調査記録と未公表原稿—

乗松真也

はじめに

小豆島^{しょうどしま}は香川県の北東部、備讃瀬戸の東端にあり、播磨灘の西端に位置する。面積は約150km²、現在の人口は約30,000人である。島内にふたつの自治体があり、北西部が小豆郡土庄町^{しょうず とのしょうちょう}、南東部が小豆郡小豆島町である。

1945年（昭和20）3月、小豆郡淵崎村^{ふちざき}（現・小豆郡土庄町湊崎^{とみおかちようじょう こん}）で富丘頂上古墳^{とみおかちようじょう こふん}が発見され、その調査に赴いたのが、高松市在住で高松経済専門学校（現・香川大学）教授の寺田貞次^{てら ださだつぐ}^{（註1）}だった。小豆島での数日間の調査を終えた寺田は、調査記録や出土資料の一部を高松に一旦持ち帰った。しかし、7月の高松空襲によって持ち帰った資料は破砕、変形し、調査記録も亡失、さらに寺田も1946年春に亡くなった。後に福家惣衛^{ふけ そうえ}^{（註2）}が地元での聞き取り調査を行い、それをもとに作成したとされる報告（福家1950）が、富丘頂上古墳^{ふちざき}にかんする唯一の公表された調査成果であった。

ところが、小豆島には寺田による日誌や写真などの調査記録、未公表原稿などが保管されており^{（註3）}、これらは富丘山頂上古墳の調査成果を理解するためには重要な史料であることがわかった。また、当時の小豆島の考古資料についてまとめたものもあり、こちらも小豆島の考古学史上貴重な史料といえる。よって、本稿では寺田の残した調査記録や未公表原稿を紹介し、その史料価値について言及したい^{（註4）}。

1. 史料の概要

富丘八幡神社で保管されてきた寺田貞次関連史料は、内容が大きく五つに分かれる。【A】「小豆島、淵崎八幡社古墳調」、【B】富丘頂上古墳の調査にかんする写真、【C】「淵崎八幡社裏古墳」、【D】「上代ノ讃岐」、【E】寺田家の書簡、である。【A】は現地での調査時に作成された日誌、記録である。【B】の写真も調査時に現地で撮影されたものだろう。【C】・【D】は、高松空襲後に京都へと戻った寺田が病床で書いたものである。【C】は富丘頂上古墳の調査報告書、【D】は小豆島の考古資料についてまとめた原稿である。【E】は、寺田および、寺田の妻から富丘八幡神社宮司へあてた書簡となっている。

2. 史料の解説

（1）史料【A】「小豆島、淵崎八幡社古墳調」

この史料はノートを切り取ったと思われるもので、1枚（表裏2ページ）ごとに10～13の番号が振られている。番号の筆跡は史料記載の数字によく似ており、寺田のものとみていいだろう。この史料は現在、富丘八幡神社で綴じられているが、この状態で読むと内容が繋がらない。綴じ方向を逆にして表裏を反対すれば内容に矛盾がなくなる。こちらが本来の表裏と推定して、【A】の内容を順に【A-10表】～【A-13裏】とする。

【A-10表】玉と石器の略側図が掲載されている。玉は「硝子製薄紫 稍大小アリ 七個」、「南京玉 五個（黄色四、紫一）」の2種類あり、「以上古墳出土」とある。またサヌカイト製の石鏃と打製石剣に

は「附近出土石器」とある。次ページ【A-10裏】が富丘頂上古墳調査記録の始まりであることはほぼ間違いない。であれば、このページの記録は富丘頂上古墳と無関係とみることができるだろう。詳細は後述するが、このページが後に富丘頂上古墳の副葬品目を混乱させる原因となった。

【A-10裏】～【A-11裏】 富丘頂上古墳の調査について時系列で記されている。3月29日10時30分ころ、富丘八幡神社本殿裏にある円形の小丘を80～90cm掘り下げたところ、主体部の石材にあたったようである。香川県小豆島地方事務所長から県神祇教学課を経由して寺田に連絡があったが不在のため、県史編纂室に知らせが行った。夕方帰宅した寺田は松浦正一^{まつうらしょういち}_(註5)から連絡を受けた。翌日(30日)、寺田は松浦を訪ねるが、松浦が不在のため県警察課と打ち合わせを行った。そして調査に向かうことになったが、濃霧で船が欠航、出航を待つ客も多いため調査は後日とし、あらためて4月1日9時に高松を出発、11時、土庄に着いた。寺田は地元関係者との面会や昼食を済ませ、14時に古墳を訪れた。この後、調査に着手するのだろう。

ここでは調査に至る流れについて触れておきたい。小豆島で古墳が発見された際、県神祇教学課からも、松浦からも寺田に連絡がいつている。当時、香川県には寺田以外にも発掘調査に携わる人物がいたことを考えると、寺田にだけ連絡があるのは特別な理由があるようにも思える。これ以前、小豆島のいくつかの調査に寺田が関わっていることから(寺田1935・1937・1939)、寺田は小豆島の調査担当者という位置づけだったのかもしれない。

この後、主体部1の平面図とともに、出土位置別に(1)～(4)のグループに分けて副葬品の解説がある。また、平面図の南半分は空白だが、この部分は調査していない可能性がある。この点については史料【C】の解説で触れる。

【12表】～【13表】 遺物の略測図。図には番号が振られており、石室の平面図中の番号と対応しているようだ。なお、現在伝わる鏡は高松空襲で破損、変形しているが、この図からは本来の直径を知ることができる。

【13裏】 森井正所蔵の「豊島村神子浜出土」の縄文土器と、「豊島村柚ノ浜へ行ク小道」の石剣(サヌカイト製の打製石剣か)の略測図がある。森井正は小豆島在住の郷土史家で、寺田が調査途中に実見したのである。縄文土器は豊島の神子ヶ浜遺跡、石剣は同島、柚遺跡の出土資料と思われる。

(2) 史料【B】

富丘頂上古墳の調査に関する写真。8枚あり、それぞれ史料B-1～8とする。

【B-1】 墳丘を掘り下げ天井石らしきものが見えている。富丘頂上古墳は2基の主体部をもつが、どちらの石が見えているのかはわからない。8枚のなかでは最も早い段階で撮影されたものだろう。

【B-2】 主体部2基の天井部が露出している。奥に神社拝殿が写っているので北から南に向かって撮影されたことがわかる。左側が主体部1、右側が主体部2である。軍服を着用した3人は発掘作業に携わっていた人たちと思われる。

【B-3】 2基の主体部の天井部が写っている。右側の天井石がB-2の右側(主体部2)と同じなので北から撮影した写真であることが確実である。

【B-4】 主体部1の天井部を外した状態。右手前に主体部2が見えるので、北からの撮影である。主体部1は板石積みの竪穴式石室で、手前中央(北寄り)に人間の頭骨がある。そのさらに北側に1枚

の鏡が見える。頭骨・鏡から東壁沿いには数振の鉄刀らしきものが配置されている。

【B-5】 天井部を外した主体部2の内部で、ほぼ全身の人骨がある。主体部構造は板石を縦に並べた箱式石棺。

【B-6】 鉄器と中心とした遺物の写真。焼失したとされる木質遺物らしきものもある。

【B-7】 鏡1枚、銅鏃2個と木質遺物らしきものの写真。寺田の保管中、高松空襲にあったため、鏡は割れて変形、銅鏃も縁が細かく欠損、木質遺物に至っては現存していない。よって、これらの遺物については出土当時の状況を伝える良好な史料といえる。

【B-8】 富丘八幡神社拝殿を背景に8人の人物が収まっている。おそらく寺田と地元の有力人物らと思われる。

(3) 史料【C】「淵崎八幡神社裏古墳」

寺田の自筆原稿。まず、1日目から6日目までの調査の経緯が記される。4日目は降雨のため調査ができず、木下空太^{きのしたくうた(註6)}を訪ね、古鏡と銅鏃を見せている。木下は島の有力者であるが、考古資料に関心があったのだろう。5日目には「手伝ノ兵士来ラズ為ニ後仕末出来ズ」とあり、この日も調査を行っていない。結局、宮司の高尾實爾に後始末（おそらく埋め戻し）を依頼している。当初から5日目で調査終了の予定だったように思える。6日目には小豆島を後にして高松に戻る。その際、「調査報告ハ県史蹟報告トナス也」、「調査者記録シ社務所ニ保存スルコトモ約シ」とあることから、当時、香川県史蹟名勝天然紀年物調査会が刊行していた『史蹟名勝天然紀念物報告』に調査報告を掲載し、それとは別に調査記録を社務所に保存することを約束したことがわかる。

この後、発見動機や届出に加えて、古墳の構造や副葬品の記載が続く。人骨については、木下の助言で軍医に鑑定してもらったようだ。

(4) 史料【D】「上代ノ讃岐」

「上代ノ讃岐」というタイトルだが、内容は寺田が見聞きした小豆島の遺跡や遺物などが記されている。土庄から始まり、小豆島を反時計周りたどって記述されている。寺田は小豆島に足繁く通って調査していたらしく、島での人脈も豊富であったようだ。当時、小豆島の考古資料について最も精通していたのが寺田だったのかもしれない。記載されている内容を見ると現在では知られていない情報も多い。

(5) 史料【E】

寺田と妻の千代子は富丘八幡神社の高尾宮司へ何度か書簡を送っている。

【昭和20年（1945）9月27日付】 高松空襲（7月4日）により高松にあった寺田宅が被害を受け、報告書と遺物（鏡、銅鏃2点、木製遺物と思われる）が焼失したことを詫びている。空襲後、寺田は京都へと戻っているようだが、再度報告書を作成するため、写真を送付して欲しいと願い出ている。

【昭和20年11月6日付】 寺田は空襲後の高松宅を搜索、破損した鏡と銅鏃を発見、これらの遺物を高松から高尾へ送付する旨が記されている。

【昭和21年1月27日付】 送付した遺物が無事に到着したかどうか確認している。

【昭和21年2月21日付】 高尾から野菜を送ってもらったことに対する礼状である。

【昭和21年6月4日付】 寺田の妻の千代子による書簡。この時点で寺田は亡くなっている。前年の6月には報告書が完成し、京都出張が重なり忙しい身の寺田に代わって千代子と息子が小豆島へ報告書と遺物を届ける算段になっていたが、高松空襲により報告書が失われてしまったとある。寺田は11月20日ころに体調を崩し、再度、富丘八幡神社の報告書などの原稿を書き上げた後（5月20日か）、亡くなったようである。【A】・【C】・【D】と【B】の一部はこの書簡と合わせて千代子が高尾あてに送付したものと思われる。

この後、千代子からの書簡が数通あり、寺田家は高尾としばらく連絡を取り合っていたようだ。

3. 史料の意義

(1) 富丘頂上古墳の調査データ

現在、印刷物となっている富丘頂上古墳にかんする報告は、福家惣衛による「富丘山頂上古墳」である（福家1950）。この報告によれば、福家は1949年（昭和24）11月27日に現地を訪れ、当時のことを知る人物や宮司の高尾定爾から説明を受けたようだ。報告は文章と主体部の写真で構成されるが、基本的な内容は寺田による【C】と変わらない。写真も【B】である。つまり、福家は神社で寺田の調査記録や原稿を実見して、それをもとに報告を作成しているのである。また、寺田は【A】・【C】で主体部から玉が出土していないことを指摘している。福家も報告の玉類の項で「管玉曲玉等は出土しない」としているにも関わらず、「されど硝子製薄紫の小玉七個、稍大小あり、（略）が出た」、「南京玉五個 黄色四 紫一（略）も出た」と記述している。福家の報告以後、富丘頂上古墳について触れる場合にはこの報告が引用され、副葬品として鏡や鉄剣などに加えて玉も挙げられる（松本1983など）。福家報告による玉の記述は、【A-10表】のそれと同じである。前述のとおり、【A-10表】は富丘頂上古墳とは関連しない蓋然性が高い。福家は、神社に残されていた史料【A】を見て、【A-10表】に記載されている玉を富丘頂上古墳の副葬品と勘違いしたのであろう。

また、福家の報告では副葬品の出土位置について詳しく述べられていないうえ（【C】をベースとしているためか）、主体部写真の印刷状態も芳しくない。しかし、【A】・【B】・【C】を詳しく検討すると、副葬品の出土位置がある程度判明する^{（註7）}。

さらに、【A】には第1主体部南半部の調査を4日目以降に行うとし、【C】では4日以降は降雨や労力不足のため調査できていないとある。すなわち、第1主体部南半部の調査は行われておらず、現在知られている遺物以外にも同主体部の副葬品が存在する可能性を指摘できる。

(2) 小豆島の遺跡データ

【D】には36件の遺跡が記されている。遺跡の記述内容をもとに、現在の遺跡台帳や自治体史と照合を行った（第1表）。その結果、【D】記載の遺跡36件のうち、現在遺跡として認識されているのは可能性のあるものを含めて19件となった。伝聞情報のみで寺田自身が確認できていない遺跡もあること、寺田の記載内容では位置特定が困難なものもあることを考慮すれば36件すべてが遺跡とは限らない。この点を差し引いても、【D】記載遺跡中には現在では知られていない遺跡がいくつかありそうだ。特に、丘陵上や斜面地での弥生土器や石鏃、剥片、石斧（伐採斧）の出土が目立ち、これらは立地や遺物を考えれば弥生時代中期後葉の遺跡の可能性がある。仮にそうであれば、弥生時代中期後葉に遺跡が急増し、

半数が丘陵上や山頂に位置する児島（大久保2002）とよく似た傾向を示す。さらに、海浜部も含めた「多様な環境での居住・生活スタイルであった」（乗松2006）当該期の備讃瀬戸の状況を、さらに補う資料にもなりうる。また、出土遺物を保管していた人物や保管場所も記されており、今後、それらが発見されれば、この記載とあわせて検討することで資料価値が高まるかもしれない。特に木下空太（忠次郎）の別荘には島内の考古資料がいくつも持ち込まれ、保管されていたようである。木下が保管していた資料の行方が判明すれば、小豆島の考古資料データはより充実したものとなるだろう。

なお、福家1950では富丘頂上古墳の報告の最後に小豆郡の遺跡が列挙されているが、これらは【A-13裏】の森井所蔵資料および【D】記載のデータと酷似する。この部分についても、福家は寺田の遺稿に依っていたことが明らかである。

おわりに

以上、小豆島で保管されてきた寺田の調査記録や未公表原稿などを紹介した。寺田や千代子の書簡からは、空襲で富丘頂上古墳出土資料を破損、焼失したことに対する遺憾の意に加えて、報告作成に対する寺田の強い意志が感じられる。寺田が病床に伏しても筆を走らせ続けたのは、富丘頂上古墳調査時の高尾との約束や、何年にもわたる小豆島の調査で協力を得た人々への恩返しの気持ちもあったのかもしれない。寺田の作業を活かすためには、今回紹介した史料を検討し、積極的に使っていく必要があると考える。

史料の掲載にあたっては、富丘八幡神社、同神社氏子、土庄町教育委員会にご配慮いただいた。また、史料の翻刻には三木倍美氏の多大な協力を得た。

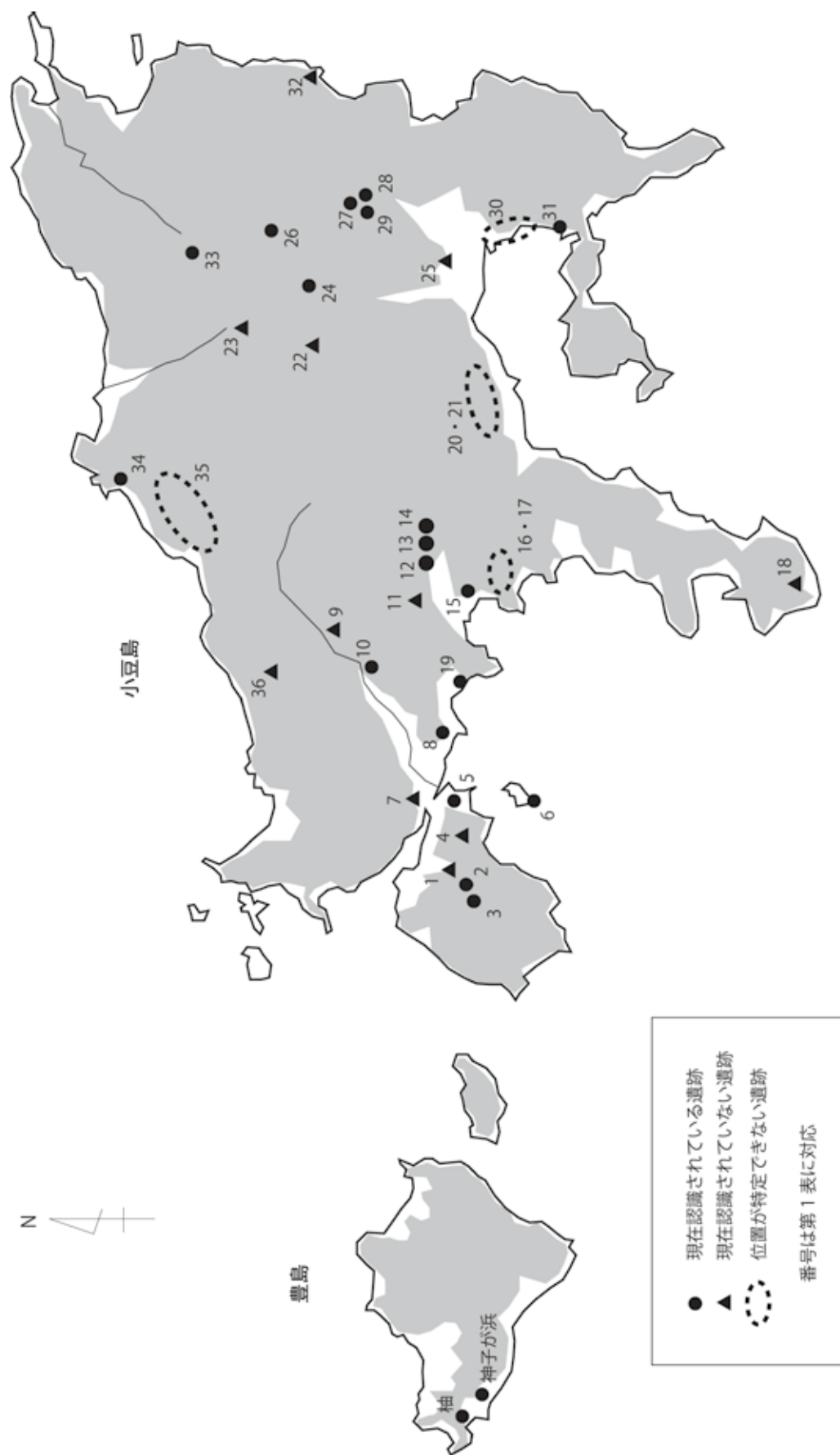
註

- 1 1883～1946年。1940年から高松商業高等専門学校（後に高松経済専門学校と改称）教授。香川県郷土研究会会長なども務めた。
- 2 1884～1971年。1941年まで教員、その後、郷土史家。
- 3 史料【B】の写真は土庄町教育委員会、それ以外の史料は富丘八幡神社で保管されている。
- 4 小豆島では寺田の報告が知られていたため、自治体史の記録や富丘頂上古墳出土遺物の文化財指定（土庄町指定）にあたっては、寺田報告が使われている。
- 5 1899年生まれ。教員。香川県文化財専門委員なども務めた。
- 6 木下忠次郎。丸金醤油株式会社（現・マルキン忠勇株式会社）初代社長。
- 7 寺田の調査記録や未公表原稿をもとに富丘頂上古墳の再検討を行った。その成果については別稿（乗松・高上2013）を準備中である。

文献

- 大久保徹也 2002「備讃地域における弥生後期土器製塩の特質」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』
- 川野正雄編 1974『内海町史』
- 川野正雄編 1984『池田町史』
- 寺田貞次 1935「小豆島の銅鐸」『考古学雑誌』25－3
- 寺田貞次 1937「銅鐸銅剣を出せる小豆島安田遺跡」『考古学』8－7
- 寺田貞次 1939「淵崎八幡山の古墳」史蹟名勝天然紀念物調査報告調査会『史蹟名勝天然紀念物調査報告』10

徳島文理大学文学部コミュニケーション学科 1998『徳島文理大学文学部共同研究 小豆島』
土庄町誌編集委員会編 1971『土庄町誌』
乗松真也 2006「弥生時代中期における漁業システムの変化と『高地性集落』」『古代文化』58-2
乗松真也・高上 拓 2013「富丘頂上古墳の研究」『香川考古』13 （予定）
福家惣衛 1950「富丘山頂上古墳」香川県教育委員会『香川県史跡名勝天然記念物調査報告』14
松本敏三 1983「富丘頂上古墳」日本考古学協会昭和58年度大会 香川県実行委員会編『香川の前期古墳』



第1図 史料【D】記載遺跡位置図

第1表

	遺跡	内容	備考	推定現遺跡名	現状	文献
1	大木戸八幡社の丘陵	石鏃		—		
2	社後の南北に連る背の高所	細合石室、石屑		紅梅山古墳	箱式石棺	『小豆島』
3	南岸地方より此丘を越した所の斜面	弥生式土器	発見多く、土庄の古道具に依て之を見た	猪ノ見山遺跡カ	弥生土器(後期多数、中期少数)、石鏃	遺跡カード
4	城山と称する小丘	古墳、遺物		—		
5	町の南部に孤立せる小丘(寺院の裏)	弥生式甕		土山古墳群カ	円墳	『土庄町誌』
6	與島の最南端の一島上	石鏃		奈島白ヶ浦遺跡	製塩土器、高杯、棒状土鏃、貝殻	遺跡カード
7	土庄と橋を隔て、直ぐ北に位する緩斜面地紡績工場国民学校所在地	石鏃	国民学校の先生から(略)聞いた	—		
8	富丘八幡神社の丘陵	古墳群、石屑、石鏃	(石鏃は)同(井上文八郎)家所蔵	富丘頂上古墳、富丘古墳群	円墳(竪穴式石室、箱式石棺)、箱式石棺	寺田1939、福家1950
9	国民学校畔の斜面	大型の石鏃斧	草壁の高女附近橋畔の小間屋店主	—	弥生土器、石鏃	遺跡カード
10	大鐸から流下する溪流が淵崎の河口平地に出る堺目の屈曲点の南岸で溪流の北に向て突出してゐる処	弥生式土器		経尾山遺跡カ		
11	同寺の奥院たる清瀬山丁度池田町の後壁をなす急峻な山岳の南側山頂近くに在る此寺の後方	石鏃	某先生之を採取された	—		
12	二溪流に別れ此二流の合する処	弥生式土器片、石屑	多く発見した	山風呂遺跡カ、信谷遺跡カ	弥生土器、製塩土器、伐採斧	『池田町史』
13	合流点より一条の水流となるすぐ南側の斜面	弥生式土器片	豊富に弥生式土器片を採集した	山風呂遺跡カ、信谷遺跡カ	弥生土器、製塩土器、伐採斧	『池田町史』
14	此流の北側では東に横はる小丘陵の西斜面の平地	弥生式土器	同中学(草壁中学)に保管され居る筈	山風呂遺跡カ、信谷遺跡カ	弥生土器、製塩土器、伐採斧	『池田町史』
15	超勝寺所在の丘陵	古墳		城山古墳	箱式石棺群	『池田町史』
16	氏神社辺より溪流に沿ふて参ると(略)丘陵を越さんとする処谷間の発源地(略)此斜面畔畔	弥生式土器片、石屑等	豊富に発見された	—		
17	此時を北に下ると急勾配を以て有名な一本松の所	祝部式土器		—		
18	半島の南端上	立派な石斧	安田村の高橋翁が保管	—		
19	丘の北部の斜面を池田湾岸に下った(略)海岸及之に	志築式類似の品		浦生遺跡	製塩土器	『小豆島』
20	古塔の敷基ある所の西斜面畑地	小形石剣	附近居住の発見者所蔵	—		
21	此斜面下街路の北畔水田	土器片	弥生式かと考へられる	—		
22	四望峰に登る溪流の左側で民家を離れた辺	遺物				
23	四望峰より裏道を下る特に山麓民家に達せんとする処小瀧池畔道路の東側切取崖	弥生式土器	神保氏(後香川県奉職)が保管	—		
24	溪畔にある洞窟内遺跡	土器片、縄文系	柴田常恵一行によりて発掘	神懸山ほら貝洞窟遺跡	縄文土器(後期)、弥生土器、貝殻	遺跡カード
25	星ヶ城	先史遺物	柴田入園等史家の調査、安田の高橋氏等も採集	星ヶ城跡		
26	安田村より湊に越す道の東畔で溪流畔現安田村隔離病舎後に当る斜面畑地	弥生式土器片、大型半偏土器	等井氏開墾の際出土、故木下翁別荘で保管	—		
27	安田村の北溪流の稍上流の西畔で草壁村との境辺に南に向て突出せる小丘陵中水道水源地になれる処	土器片	安田先住の印刷家の採集	釘ヶ谷遺跡カ		
28	此地方溪流畔	銅鏃、銅剣、弥生式土器、石斧、石鏃	香川幹夫氏が居られたので採集も学術的に出来	牛飼場遺跡(概が谷遺跡)、栗地遺跡	銅鏃、平型銅剣、弥生土器(中期)、石斧、石鏃、石鏃、須恵器	『内海町史』、寺田1935、1937
29	同品出土地の道を隔て東部にある溜池(五郎池?)畔	弥生式土器	高橋が証明	栗地遺跡カ	弥生土器(中期)、石斧、石鏃、石鏃、須恵器	『内海町史』
30	海岸にある孤立丘陵	何か遺跡	高橋翁から聞いてゐる	—		
31	龜山	古墳、古鏡		亀尾山古墳	箱式石棺、散形鏡	『内海町史』
32	岩ヶ谷の大半島地	古墳、石剣	木村幹夫氏の案内で吉備考古学会の見学旅行の行われた際(略)発見	—		
33	福田水晶山の西南に当る処	遺物(壺カ)	木下家別荘に保存	平間遺跡	弥生土器(中期)、石鏃	遺跡カード
34	琴塚のある処附近	焼物	弥生式ではなかったかと考へられ	琴塚浜遺跡カ	弥生土器(中期～)、須恵器	『土庄町誌』、遺跡カード
35	北海岸の一瀬の畔	弥生式遺物		—		
36	北海岸で島の南側に下る旧道	石斧(長三寸位)	一氏が(略)発見された、同氏が保管してゐる	—		

史料【A】 小豆島、洲崎八幡社古墳調

【10表】

硝子製薄紫 稍大小アリ 七個

(註A)

附近出土石器 石鏃二 サスカイト

石剣一個

(註B)

【10裏】 ～ 【11裏】

四月一日(晴) 小豆島、洲崎八幡社古墳調

九時出帆 正宗丸ニテ出立、十一時土庄着、地方事務所訪

地方事務官(小豆島地方事務所長) 松谷栄氏

県視学官井熊二氏面会、案内ヲ受ケ富岳山麓瀧津荘休憩、洲崎村長森口寛蔵氏始メ八幡神社氏子

洲崎村赤穂屋(アコヤ) 高橋久一

全 北山 平井多四郎

警察部長永田勝□氏ニ面会

村長厚意、当地特産牛肉すきやき饗ヲ受ケ他ノ諸氏ハ社務所ニテ食事セラル

午後二時登山、社務所ニ至リ参拝ノ上、発見地ニ至ル

船舶特別幹部候補生隊 若潮隊

部隊長 松山作二中佐

来会ヲ受ケ宮本宏(ヒロシ) 中尉並ニ当日発見ニ関係セシ山崎一雄少尉モ来会サル

山崎氏ニヨレハ発見ハ三月廿九日前十時半頃ナリシ由、此地ハ八幡社本殿裏ノ円頂形地ニテ頂上ハ以前経塚トシテ知ラレ古鏡ニ面出土セシ所、自分モカツテ調査セシ地ナリ

地方ノ崇敬地ニシテば樹木密生シ居リシガ今回軍用トナリ頂上中央ヲ円形ニ掘リ下グ約8、90c程掘リ下ゲシ所古墳石室ニ当リシケリ当時関係サレシ山崎一雄少尉ニヨレバ三月廿九日十時半頃ナリシト、次デ地鎮式?慰霊祭?ヲ行フコト、ナリ 地方事務所長ノ来会ヲ求メラル、事務所長初メテ知ル所トナリコ、ニ県神祇教学課ヲヘテ調査ヲ依頼サレシナリ

県ノ佐々木係ヨリ学校電話小生不在ノタメ県史編纂室ニ連絡以來アリ 松浦正二氏ヨリ片書宅ニ通達アリ 小生夕帰宅承知 翌日松浦氏訪 氏不在ノ為県出頭、警察課原氏ト打合せ、土庄ノ地方事務所遂カニ警察署ニ電話、今明日中ニ□上ノ旨通知ス

此日、本年初テノ濃霧、船欠航、棧橋駅前ハ之カタメ本土行客殊ニ此頃ハ□光者ノ往復モアリ方々長蛇ノ列ヲナス 土庄通モ十二時半出帆見込ツカズ已□□□中止帰宅 午後晴レシモ□□□明□トス

(註B)

(1) 北壁ヨリ1m80c所、東壁ニ接シ刀片?一個少シ南ニテ壁石ニ□ニハサマリ刀片?一ツ

此両片ノ中間辺ヨリ銅鏃身二枚

(註 C)

(2)

奥壁ヨリ 50 c 東壁ヨリ 15 c 所 此辺ニモ銅鏃一個

(註 D)

(3)

石室ノ西北隔壁ニ接シテ

(註 E)

此他、東壁ニ接シ刀片鏃辺ナド各所散在セリ

(註 F)

(4)

奥壁北ヨリ 1 m 20 c ノ所中央、西壁ヨリ 40 c 東壁ヨリ 35 c ノ所、鏡一面 表面ヲ上ニシテ発見、此附近ハ朱色土壤濃厚、且褐色ヲ呈シゴク脆弱ニテスダ粉末状トナリ 且細線状ヲナシ木質ノ如シ軍隊手伝ノ井上鶴一君□シキクニ之ヲ称セリ、鏡ヲ取除キシ所 下ハ鏡裏面ノ紋様型ヲ呈シ綺麗ナ緑シヤウモ附着シトルニ忍ビサル□ナリキ 此上土ヲトリシ時 下ニハ井上君ノ申セシ如ク明ニ木質片ガ発見サレキ之ニヨリ鏡ハ明ニ木製品ノ上ニノセアリシカ□□木箱ニ納メアリシカラ察シ得カタリ 且此下辺土ハ□クカタク、ねり土ノ如キ□アリ 鏡ヲオク処ノタメねり土ニツクリシモノ？ 木□□小片モコノ辺ニテ発見セリ 玉ノ類ハ遂ニ見当タラサリキ)

四月三日ノ調査ハコレダケニテ中止 南半ハ翌日ノ調査ニユヅル

【12 表】

(註 G)

【12 裏】

(註 H)

【13 表】

(註 I)

【13 裏】

(註 J)

註

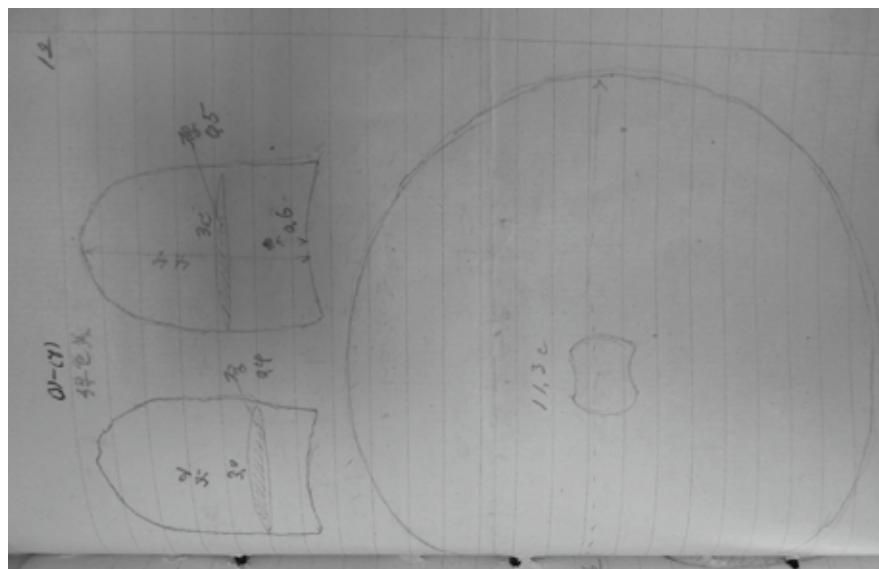
- A 略測図 白玉 2点
- B 略測図 石鏃 2点 打製石剣? 1点
- C 第1主体部 副葬品配置略図
- D 第1主体部 副葬品配置略図(部分)
- E 第1主体部 副葬品配置略図(部分)
- F 第1主体部 副葬品配置略図(部分)
- G 略測図 銅鏃 2点 鏡 1点
- H 略測図 鉄刀剣 4点 鉄斧 1点 鉄鏃 4点
- I 略測図 石突? 1点 鉄刀剣 3点 不明鉄器? 4点
- J 略測図 縄文土器 1点 打製石剣? 1点

[illegible][illegible]

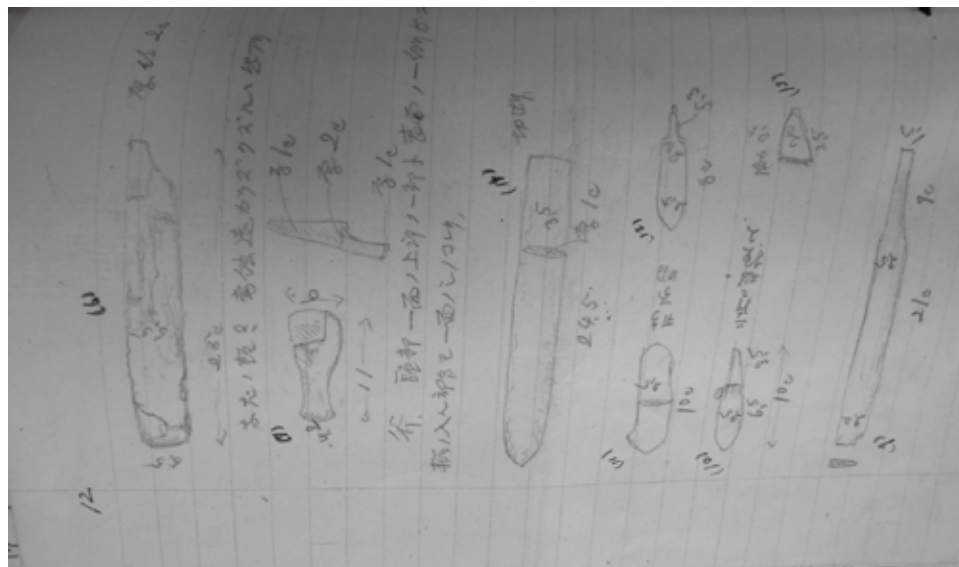
(3) 東壁の50cm 東壁の16cm所、以て、
石室、西北隅、壁接砂

(4) 東壁の北の1m 20cm所中央、西壁の40cm所
35cm所、鍵一箇、表面の上ニシテ発見、此
ハ赤土塊（濃黄）且褐色を呈セリガ泥附
スガ鉄末状ナク果細粒状ヲナシ水能^{100%}溶解
シ下ノ井下部ニ至ルニカリニ之ヲ解キ、鍵ヲ取
シ下ノ錠痕跡ノ紋様型ヲ呈シ信屬ナ根
ニ附着トスモ古モノハ形ナク比上ニタツト然
ニ下部ノ中セシム如ク、木能片が全長約
之10cm使ハ服、木能片上ニニセリシカ
物ハ内方外方ヲ容メ得ル。
且其ノ周辺ニ多ク使用セルモノ、如ク玉
像等朱色ヲ呈セリ。
且其下地土ハ概シク白、灰土ノ如ク
木能片ハ日ヲ収メ、ツクリマシ
モ、疑ハズ此ニシテ、又見セリ
四月二日、調査ハ完了ナリ。

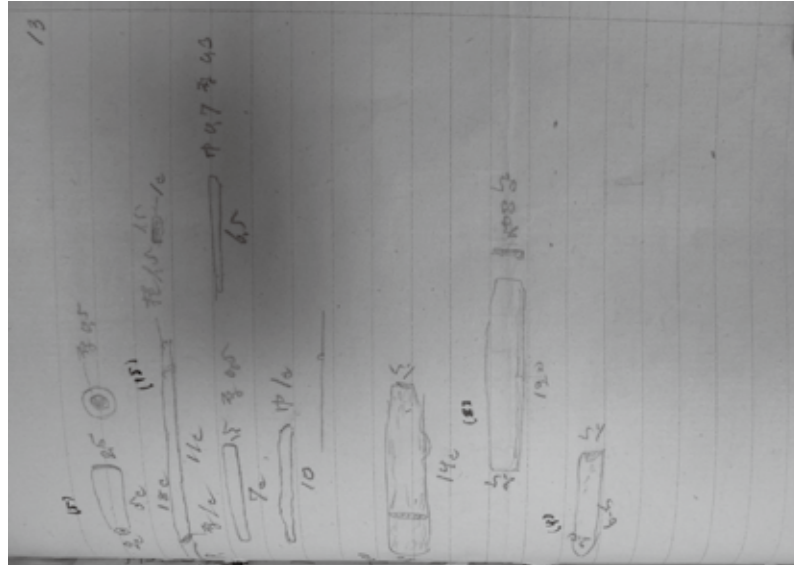
【A-12表】



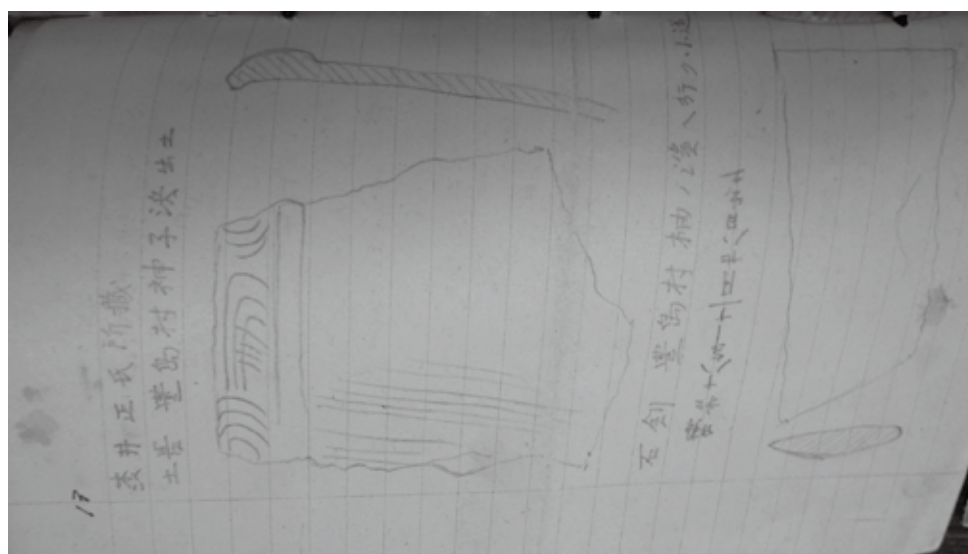
【A-12裏】



【A-13表】



【A-13裏】



史料【B】

【B-1】



【B-2】



【B-3】



【B-7】



【B-8】



【B-4】





【B-5】



【B-6】

史料【C】 淵崎八幡社裏古墳

小豆島調査ニ関スル故人遺稿ノ写シ

香川県小豆郡淵崎村 八幡神社 所蔵

淵崎八幡社裏古墳

土庄ノ地方事務所カラ淵崎ノ八幡社裏デ古墳ガ発見サレタカラ調査シテ呉トノ通達ガアッタノデ史蹟調査委員寺田貞次出張調査シタ 地方各位ノ厚意デ八幡社社務所デ滞留調査スル

第一日

地方事務所ノ案内ニテ警察署長同道淵崎存置ノ軍ト打合セノ上発見地淵崎八幡社ニ至リ社掌高尾實爾氏ト会ス 淵崎大鐸両村長氏子總代各位並ニ井上文八郎氏モ来会アリ 調査打合セヲナス 氏子ニハ古墳移転説アリシモ余ノ意見ニ従ヒ其假保存ニ決シ愈調査ニ決ス 午後現場視察軍部隊長等モ来会アリ

第二日

古墳ハ社殿裏小丘上ニテ二個ノ組合石棺ヲ蔵ス 先ヅ発見ノ両石室ノ破壊□ヲ再開キ其組合石室タルコトヲ確メ其中ニ再ビ置カレシ遺物唐櫃ニ納メシ儘拝見ス 後遺物ハ社務所ニ保管シ両棺上ノ泥土ヲトリ除キ両棺蓋石ヲ露出セシメ之ヲ測定撮影ス

第三日

大石室蓋取除キ室内調査前ニ取出セシ遺物以外ニ古鏡刀子鉄鏃銅鏃二個ヲ発見ス

第四日

降雨ノ為調査出来ズ 西村二木下空太翁訪問報告 発見ノ遺物中古鏡及銅鏃ヲ御覽ニ供ス

第五日

手伝ノ兵士来ラズ為ニ後仕未出来ス 高尾氏ニ依頼調査終ルコト、ス

第六日

調査報告ハ県史蹟報告トナス他 和紙ニ調査者記録シ社務所ニ保存スルコトモ約シ帰高ス

発見地

香川県小豆郡淵崎村淵崎八幡神社社殿裏小丘上

此小丘ハ富岳山塊ノ最高所ニ当リ自然ノ円頂地デアル 後世其周二細道を作り今ハ人為的ニ築造セシ円墳形ヲ呈ス 此頂上ハ後世経塚トシテ利用サレシ処デ経塚ハ先年発掘古鏡等遺物ヲ発見シタ所デ従来一般ニ経塚トシテ祀ラレテキタ処デアル

発見動機

昭和年中ノ世界大戦陸軍ニテハ此丘上ニ機関砲ヲ装置スル為頂上ヲ掘リ下ゲシ際偶然ニモ石室ヲ発見スルニ至ッタモノデアル

届出

発見セシ石室ハ二個ニシテ何レモ其ノ一部ガ破壊サレタノデ内部ヲ視ヒシ一個ニハ人骨ヲ見頭骨モ備ハリ居ルヲ発見、他ニハ刀片等鉄片ヲ多数発見シタ 依ッテ社務所備付ノ白木唐櫃ニ此等遺物ヲ納メテ一石室間ニ奉安シテ破壊セシ個所ヲ元ノ如ク閉シテ土ヲ覆ヒ墳ノ周囲ニメ縄ヲ張りテ出入ヲ禁ジ土庄地方事務所ニ報告セラレタ 即チ地方事務所ヨリ県係連絡ヲ取り正式調査トナッタモノデアル

調査

県ヨリハ史蹟名勝天然紀念物調査委員高松経済専門学校名誉教授寺田貞次氏出張調査スルコト、ナリシ前述ノ数日ニ亘リ調査ス

調査方法

八幡神社氏子総代ハ調査委員到着ノ日社務所ニ参集協議ノ上古墳ヲ移転スル意向ナリシガ調査委員ノ意見ニ依リ移転ヲ中止シ現状ノ儘ニテ軍事上設備ヲ施シ墳ハ調査ノ後旧態復シ其上ニ石祠ヲ置キテ保存調査ノ結果ハ之ヲ報告書トシテ遺物ト共ニ社務所ニ保存スルコト、ナル

発見石室

石室ハ二基ニシテ東西ノ方向ニ相並ンデ築造サレニ基ハ其大サヲ異ニシ東側ノハ大キク西側ノハ小形テ少シ食ヒ違ヒニ並ベラレテキル 大石室ハ北ニヨリ小石室ハ南ニヨリ但シ位置ハ高低ノ関係ヲツクラズ同高ノ位置ニ置カレ居レリ

構造

石室ハ安山岩質平板石ヲ用ヒテ寝棺型ニ造レル所謂阿波式石室ニ組合石室（石棺）ト称スルモノデアル 最初上部ノ土壤ヲ取除キシ所ニヨレバ両石室共上部ニハ数枚ノ平板石ヲ並ベテ蓋トナシ其間隙ニハ更ニ小平板石ヲ以テ土砂ノ侵入ヲ防ギ此両石室ノ蓋石ノ間ニハ別ノ平板石ヲ並ベテ其間ノ連絡ヲ保テル形跡ヲ見タリ 其平板石ノ寸法ハ控ヲ焼失セシ為記載シ得ズ 石室ノ周壁ハ両石室其積方ヲ異ニシ小石室ノ方ハ平板石ヲ縦ニシテ之ヲ築キ大石室ノ方ハ比較的小形平板石ヲ用ヒテ煉瓦式ニ横ニ積重ネテ周壁ヲ作り居レリ 頭骨ノ部分ニハ枕石ノ置カル、モノガアルガ小石室デハ頭骨下ニ小平板石一枚ヲ置キ枕トナリ居タリ

室ノ形態ハ両室共ニ北端最モ広ク南端ニ向ツテ狭ク造ラル 此点モ讃岐ニ普通ナル組合石室ト異ラズ大サハ大形ノ方ハ長四米□位 幅ハ一米□位、深サハ一米□足ラズナリ 小形ノ方ハ長二米□ 幅一榧位 深一榧位ナリ

遺物

大形石室ニハ頭基骨壹個ト副葬品トシテ古鏡一面 刀大小数振 刀子数本 鉄鏃数本 斧様鉄器壹個

並ニ銅鏃貳個発見 小形石室ニハ副葬品ノ発見ナク遺骸ハ頭骨ヲ初メ胴骨両手両脚骨マデ完全ニ残り居
レリ (写真)

遺骨

木下空太翁ハ遺骨ハ専門家ノ鑑定ヲ乞ハレ度注意アリシモ当時軍中ニ専門ノ軍医居ラレシヲ以テ氏ノ研
究ヲ乞ヒシ処氏ハ頭骨ニ就イテ測定ヲモナシ 齒ノ状態等ヲモ調べ大腿骨等ヨリモ推シ大形石室ノ主ハ
男子 小形石室ノ方ハ婦人ノ如ク考ヘラル、トノ意見ニ落付ケリ 頭骨ハ別ニ現今人ノ頭骨ニ比シ差異
ヲ認メズ 唯手ガ稍長キ感アルノミナリトノ意見ナリキ

朱使用 遺骨ノ頭骨ニハ朱ノ附着ヲ見 殊ニ大形石室ノ頭骨ニハ其残着著シク綺麗ナル紅色ヲ呈シ且頭
骨下ノ床土ハ他ノ部分ヨリモ硬ニシテ朱ノ残存多ク古鏡ハ其朱色土壌ノ部分ヨリ発見 土ニハ古鏡ノ紋
様ヲトメ綺麗ナリキ 又小石室ノ方ニテハ側壁平板石蓋ノ内側ニモ朱色ヲトメキタリ 組合石室ニ
ハ普通朱ノ使用サレ居ルモノナルガ此石室ニ依テモ同様朱ヲ使用セシヲ認ム

鏡

大形石室ノ中央ヨリ稍北ニ偏シタ所頭骨ト略同所ニテ発見ス 写真ノ如キモノニテ仿 (ぼう) 製鏡ナレ
ド紋様ハヨク出来居レリ寸法モ測リシガ不幸災火ニ会シ破損セシハ遺憾 現物ハ社ニテ保管ス

銅鏃

大形石室ノ東壁床上ニ置カレシモノト見エ東壁下ニ接シ頭骨ノ東側ニ壹個並ニ夫ヨリ稍北ニ偏シテ壹個
都合貳個発見セリ 其形態ハ写真ノ如クニテ長サ一厘幅一厘下部中央ニ壹個ノ小孔ヲ穿テリ 此種鏃ハ
ハ讃岐ニテハ自分ニハ最初ノ発見ニテ寧珍ラシキ遺物ト考ヘラル 災火ノ会シ色彩変化セシモ発見当時
ハ緑錆綺麗ナリキ鏡ト共ニ社ニテ保存ス

鉄鏃

銅鏃ノ他鉄鏃ハ多数発見大石室ノ頭骨ノ東壁下ヨリ其北部並ニ石室ノ西北隅ニテ數個宛発見ス 何レモ
破壊シ居リシ為本數ヲ知ルコト能ハズ 其形態モ多少差異アリシカト思ハル、モ確實ニ知り難シ 但大
サハ何レモ小サク大形品ハ見当ラザリキ

刀

大小數本アリシガ如ク頭骨ノ東壁床上ニ之ト並行シテ置カレアリ南西壁ノ北部ニモアリシヤウナレド既
ニ腐食シテ明ヲ失ヒ居レリ

短刀中ノ一本ニハ柄ト胴部トノ間ニ木質ヲ残シ居リ 之ヲ遺物トシテ称ラシキ所ナリシガ災火ニテ焼失
遺憾ナリ

ナタ

斧様鉄器

なたノ如キ形態鉄器デ刀ヨリモ少シ北ニ偏シテ東壁下床上ヨリ発見シタ 此種ノ鉄器モ発見少キ方ニ付
称ラント思ハル

鉄斧

之ハ頭骨ノ東壁下及西壁北部下ヨリ発見三個許出土セリ此種遺物ハ他ニテモヨク出土スルモノナレド此古墳ヨリモ出土セシコトハ有意義ト思ハル

遺物ハ以上ノ如クナレド玉類ノ出土ナカリシハ稍異様ノ感ニ打タレキ

史料【D】 上代ノ讃岐

上代ノ讃岐

昭和廿一年病床中記す

調査ノ一ト全部羅災焼失の爲地名人名を忘却又遺物も寸法等忘却爲に記述愈概括に過ぎざるを遺憾とす
城南

小豆郡内海島嶼中東部を占むる一群で西方に散在する塩飽諸島と並んで先史文化調査上重要地域である
小豆本島その他豊島並に小豊島を含んである地域は殆全部山岳性で小豆本島は土庄の辺で二島として觀られ
此間に土庄灣があり北部は急峻で湾入の利用東北には福田の小湾形があるのみである 本島の南側には
池田灣草壁の湾を有し地形も稍低緩である 先史遺跡は此關係によつて出来てゐる為□である土庄附
近では大木戸八幡社の丘陵がよく知られ石鏃出土地と聞く 採集し得なかつたけれども社後の南北に連
る背の高所には組合石室の埋藏もられ石屑等の散在も認められた 殊に南岸地方より此丘を越した所の
斜面には弥生式土器の發見多く採集品は土庄の古道具に依て之を見た 此地海岸では土庄人家の西端に
近き小丘城山と称する小丘は古墳伝説もあり遺物出土地と聞き又町の南部に孤立せる小丘（寺院裏）上
では弥生式甕の埋藏を認め又風光明媚なる與島の最南端の一島上にて石鏃一個を發見した 海浜に於け
る遺物は未だ之を見なかつた

小豆本島では土庄と橋を隔て、直ぐ北に位する緩斜面地紡績工場国民学校所在地に當る測崎村あこや
（赤穂屋）では早くから遺物發見地として知られ国民学校の先生から石鏃の採集を聞いた事がある 此
村で景勝地として有名な淵崎の八幡宮丘陵は遺跡に富み丘頂より東南に細長く下れる山尾の禿地は古墳
群地であると共に遺物散在地で石屑の散在を見石鏃一個を採集した（井上文八郎氏案内調査の際發見遺
物は同家所藏）し此丘の東南に突出せる半島性丘陵の如き調査したが遺物らしきものを見なかつた

淵崎は本島背梁山岳より流下する溪流の海への注入地をなし溪流兩岸共に急峻な地形を呈してゐる 然
かし唯一の交通路は此谷に於いて開かれ北岸に沿ふて道路は山を越し北海岸地方を連絡して居り途中も
開發畑地をなし馬越小馬越等から寺院裏を越し北岸の滝宮地方にも通じて居る 然かし南岸は全くの急
崖で森林地を呈している 従て遺物は北岸斜面から發見される小馬越にある寺院辺にも之を發見し得た
ろうに思ふが未だ之を聞かず こゝには熱心な研究家が居られるのであるが未だ發見されてゐない 然
かし北海岸に通ずる道路の東斜面に當る大鐸村では遺物が發見され国民学校畔の斜面よりは大型の石鏃
斧一個採集とされてゐる 当村当地の国民学校に奉職中發見されたもので目下草壁に居住して居られる
（草壁の高女校附近橋畔の小問物店主）小豆島で見た石器中では秀逸の品である 溪流の北斜面は遺跡
地と考へられるが偶然の出土で遺跡として明確な場所の認識が出来なかつた 然かし大鐸村の太田家所
藏に弥生式土器がある 之は同家の農園であつた土地から開墾の際發見されたもので踏査の結果遺跡と
して好資料地たる事を知つた丁度大鐸より流下する溪流が淵崎の河口平地に出る堺目の屈曲点の南岸で
溪流の北に向て突出してゐる處に當り急崖下の少し□りの斜面である段階式に開きて果樹園造られてい
る所で今も尚弥生式土器細片を發見することが出来る此地方では先史住民遺跡研究上好適の資料である
次に本島では池田町附近が遺跡に富んでゐる 町は背梁山脈の南斜面で南側は東南に突出せる三都半島
と西南に突出する小半島とを以て池田の湾を控え其間好適の平地を形成 一条の道路東西を走り安田村

に通じ又北に分支し大鐸村に通じてゐる。此地では西南半島には応神天皇御祭祀址の伝説があり又対岸に当る超勝寺丘麓平井代官屋敷址と共に釜の出土があるを聞いてゐたので先史遺跡でなからうかと考へてゐた。然し此方面の出土品は実見の幸を得ず村の史家たる某氏に御伺したが矢張り伝説のみで遺物は確実には御承知ないやうであつた。然かし此伝説は此地方に於ける遺跡の存在を物語るものであつた事は認識する事が出来中には遺跡に富んでゐることを発見した。

超勝寺の住職より聞く处によると同寺の奥院たる清滝山丁度池田町の後壁をなす急峻な山岳の南側山頂近くに在る此寺の後方より石鏃が発見され先年調査の爲来訪の某先生は之を採集されたと余は踏査して見たが発見し得なかつた。

然かし町の東南部安田街道峠の北側丘陵の北斜面に当る地域には一条の溪流が流出西に流れて池田湾に注入してゐる。此溪流畔は比較的平地も発達し豊富な遺跡をなしている。殊に其発見地は二溪流に別れ此二流の合する处は舌形の扇状地を為此地域は遺物に富んでゐる。弥生式土器片石屑等多く発見したこの辺では溪流も水清く水量も豊富であり居住地として好適に感じた。合流点より一条の水流となるすぐ南側の斜面は既に果樹園に利用されてゐるが此地よりも多くの遺物を見又其下につゞく畑地よりも豊富に弥生式土器片を採集した。又此流の北側では東に横はる小丘陵の西斜面の平地既に果樹園として立派に経営されている(某家)所中央に東西につくれる園内道南畔井戸附近よりは井戸開墾の際遺物弥生式土器を発見した(遺物は当村草壁中学生の勤労作業ありし時であつたから同中学に保管され居る筈)尚此附近表面には弥生式片屑の散在があり土器は俗にびくくの碗と称してゐる。此辺にびくく居住し土器を焼いたのだとの伝説である。

此他町附近では東南部に八幡社があり遺跡らしくも思はれるが未だ発見してなかつた。然かし超勝寺所在の丘陵地には先年古墳的遺跡発見され井上文八郎家等の努力に依り吉野時代の勤王家□として□築されたと聞いている。果して如何なる遺物であつたか存じないが西に向つて延びてゐる丘上の如きは遺物も発見し得るかとも思はれる。此上の南方では■■■(註A)内の氏神社がある。此社の附近(路の西側)居住の某氏の案内に依り遺跡を確め得た。部落の東北の谷間で氏神社辺より溪流に沿ふて参ると地形歩毎に高く丘陵を越さんとする処谷間の発源地に達する。極く狭い発源地であるが水は清く草茂り湿潤のきらいはあるが北側の斜面は細き一条の道を以て峠をなし花崗砂質地で高燥であり居住には不適でない。此斜面峠道畔などに亘り弥生式土器片並石屑等が豊富に発見された。此土器は俗に——某の茶碗と称してゐる。先史遺跡として好資料である。此峠を北に下ると急勾配を以て有名な一本松(純燈松?)の所に出る。此道で一個の祝部式片を採集した。

之より南へ三渚半島であり遺跡も存在する事と思ふが余りきかなかつた。然かし半島の南端上では立派な石斧の出土があり先年柴田常恵翁の案内された安田村の高橋翁が保管して居られるときいた。

斯く池田町附近は先史遺跡に富んでいるに係はず早くから知られている釜出土地の真相を知り得なかつたのであるが一旦応神天皇御祭祀の遺跡を確めんと町の西南に突出地を踏査した。封土地形は背に依りて南北両側所に発見何れが夫に当るものかは不明であり□□いわくら式のものでないことを覺つたのであつた。帰途丘の北部の斜面を池田湾岸に下つた時偶然にも海岸及之につゞく砂質平地畑中に於て土器小片を発見した。然も小地域とは云へ海浜より畑地にかけて□豊富に散在せるを発見した。然も此土片は普通の弥生式と異り全く塩飽本島等に見る又岡山県方面に見る薄手硬質貝文様を有する志楽式類似の品であるので驚きこれこそ伝説の釜であることを自信した。小豆島に於ける此様土器出土地を一ツ増したことを悦んだ土地は——と称して南北両側に山尾海浜に突出其間に生ぜる狭小の砂浜と小規模の平地

とを抱ける処で上古住民居住には適切地と考へた

次に草壁方面を觀る有名な寒霞溪を背景として四望峰先年星ヶ城の高頂と有し内海の良灣入を控えて西南は三都渚半島東は坂手に至る山脈に囲まれ寒霞溪並に清滝の溪流流下し海岸と流域狭小の平地を形成し注入口に於て草壁安田の人家發達し斜面地には西に西村東に苗羽峠を越て坂手港と成つて居り東部山岳間の地形を利用して道路は峠をこして東岸に通じてゐる 遺跡溪流畔に多いのは当然であるが又斜面地にも多少之を見西村では近時オリーブ園として利用されるに至つた斜面地が相当広いので開墾が行はるゝと共に遺物が發見され木下空太翁の退隱後の□莊地の西北に當る山尾背に在るち、ば、さんと稱し古塔の数基ある所の西側斜面畑地で小形石剣が一個發見された 附近居住の發見者所藏してゐる 踏査したが余り發見はしなかつた 然かし此辺より奥に属する谷間より把□は發見されると申すから先史遺跡は溪流の上流迄あるものと思はれる 又此斜面下街路の北畔水田にて灌漑用井戸を掘つた際地下より土器片を發見文様もあつたと聞いた 土器種類等確美に知り得ないのは遺憾であるが弥生式かと考へられる 草壁に於ては寒霞溪畔に於て各所遺物をきく 四望峰に登る溪流の左側で民家を離れた辺から遺物を發見したと小豆島中学で聞き又四望峰より裏道を下る特に山麓民家に達せんとする処溜池畔道路の東側切取崖より切取工事中弥生式土器を發見されたが工事監督の神保氏（後香川県僱職）が保管して居られるのを拝見した

寒霞溪畔遺跡として最近注意を引いてゐるのは溪畔にある洞窟内遺跡である 洞窟中はら貝洞では先年先住民遺物が發見され東京都より調査の柴田常恵翁一行によりて發掘の結果遺物の土器片が層的に異つて居り下部には縄文系をも發見したりとて世の注意を引き翁によりて高松で開催の郷土研究会にて發表され尚研究の上世に發表されることになった 果して事実とせば小豆島に於ける先史文化上一与を□えること、なる

尚星ヶ城には木下翁の一代の事業として古社再興の計画で中央より技術家を聘し柴田入岡等史家の調査を乞はれし結果先史遺物の發見をも見た由承知す 従来安田村の高橋氏等も採集し居られし為其案内によりしものならん

安田村にては郷土史家笠井高橋諸氏の在住地とて遺跡は早くより知られ先年笠井氏（己に故人となられしも令息は医院開業）の案内で出土地を視察した 安田村より湊に越す道の東畔で溪流畔現安田村隔離病舎舎後に當る斜面畑地で遺物は笠井氏開墾の際出土したもので弥生式土器片數個採集されてゐた 一部は寄贈を受け現今は小豆島採集品と共に故木下翁別荘で保管されてゐる 大型半偏土器等相当参考になるべき出土があつた

又安田村の北溪流の稍上流の西畔で草壁村との境辺に南に向て突出せる小丘陵中水道水源地になれる処よりも遺物土器片が發見された 安田村先住の印刻家の採集談である 未だ踏査採集はしてゐないけれども事実に相違ない 尚此地方溪流畔には各所先史遺跡が少くない 之は先年此等の遺跡にて偶然にも銅鐸銅剣の出土あつた事実を確め得るに至り誌上及發表して以来遺跡の注意を引き後其地の溜池拡大工事の結果多数の遺物が發見され小豆島中学には當時斯道の研究家香川幹夫氏氏が居られたので採集も學術的に出来好都合であつた 此地は清滝より発源する相当な溪流で殊に銅鐸出土地は瀬も清く其地形上先史人居住に好適地であり銅製品と共に弥生式土器も發見され又溪流を隔て其西南に當る斜面地俗に栗地と稱し□所在地であつたと高橋翁の報ぜられた処である 溜池拡大工事の為斜面切下の際多数の遺物が發見された 弥生式土器の他石斧石鏃も少くなかつた

又銅品出土地の道を隔て東部にある溜池（五郎池？）畔よりも従来弥生式土器の發見があることも高橋

翁の証明する所であり早くから出土地として知られてゐる。安田村以南では海岸にある孤立小丘で応神天皇御遺跡と伝ふる丘上には何か遺跡の存する由高橋翁から聞いてゐるが一度視察したのみで充分な事実を確め得なかつた。又其南位し西に向て長く發達せる龜山(?)よりは古墳古鏡の發見があつたが先史遺跡は充分に知り得なかつたしこれより坂手港の方面にかけても未調査である。

小豆島東岸の湊、岩谷方面も余り遺跡を聞かず先年木村幹夫氏の案内で吉備考古学会の見学旅行の行われた際岩ヶ谷の小半島地で古墳を發見附近で石剣とかの發見があつたと紙誌上で報ぜられたが石器は如何なるものであつたか遺憾乍ら拝見せずにある。此海岸地は急峻で先住民にとつても居住地として不適当と思はれ自然遺跡のないのが當然と思はれるが北部の福田村辺になると地形も稍開け溪流の灌漑もあるので遺跡もあつてよき感に打たれたが未だ聞かなかつた。

之より小豆島の北海岸は一帶に急崖で風光はよいが遺跡の方は正反對である。然かし此の急峻地と雖山頂及斜面で溪流出源地畔には遺跡が見られる。星ヶ城の遺物發見の如きも其一ツであり又星ヶ城から少し北に下つた處で福田村に下る瀧の上に當る溪流畔即ち当島での有名な福田水晶山の西南に當る處現今数軒の部落をなしてゐる處よりは遺物が發見されてゐる其一個■(註B)(高二寸位)は先年借用木下家別荘に保存願つて置いた。又北海岸の琴塚のある處附近に伝説を聞いた昔は山頂より北に向て下れる山尾の高所に居住民のありしが出水の爲流下し焼物類が下方で發見されたと如何なる焼物であつたか不明であるが或は弥生式でなかつたかと考へられ又北海岸の——瀧の畔よりは弥生式遺物出土があつたと聞き迄迄登り其上方の開墾地を調べたが充分な遺物を採集し得なかつた。

又北海岸で島の南側に下る峠より北海に下る旧道で——氏が石斧(長三寸位)一個を發見された。実物は拝見もし又同氏が保管してゐる。

以上の事実によると島の北岸では低地には少く反て高地に於て多少の遺物のあることが考へられた。

後に八幡神社務所に滞在調査せらる。香川県小豆郡湊崎村。八幡神社所藏。

香川県史跡調査委員

高松高等商業学校教授

寺田貞次氏

調査書

昭和廿年三月廿九日より十一月一日に至る調査期間

註

A 集落の意。

B 壺の絵。